

○司会

はい。では引き続きまして総合討論、あるいは質疑応答という形で進めさせていただきます。改めまして、登壇者を御紹介いたします。本学の学長代理、教育担当理事の安田でございます。よろしく願いいたします。同じく千代・安田・藤原の3名が報告順で着座しております。では、早速ですが、これまでお話をさせていただきました内容に対して、質問等がございましたらお聞きしたいと思います、いかがでしょうか。ただいま、係の者がマイクを持ってまいりますので、何なりと御質問いただければと思います。皆様いかがでしょうか。はい、すみません。お願いいたします。

○質問者1

もしなければということで質問させていただくんですが、我々も一応まあ本学も取り組んではいるんですが、なかなか実行できないということで、このシステムを大体理解したと思うんですけども、学習成果の可視化ということで、先生方がいろんな取組をなさっているというのがよく分かりました。それで私が学長にお聞きしたいのは、実際に学生さんが授業をしている、一応補習という話が出たと思うんですけども、ということは授業時間としては90分授業でなさっているんですね。そして一番感じたのは、こうやって一生懸命頑張っている教員(学術研究院の組織の中で)をそこに一括して管理しているというので、そういうふうな広島大学さんも同じような取組をなさっているのを拝見したんですが、そうしますと教員評価というのはどうなっているのか。一生懸命やっている先生とそうでない先生もいると思うんですけど、これはやっぱり学修成果の部分だと思うので、教員評価をどのようにやっているのかというのがちょっと気になったものですから、今日の場面とそんなに関係ないんですが、やっぱり学修成果という部分だと教員力というのは重要だと思いますので、授業の形態と、教員評価がどのようになっているのかなということ、学生の視点から教員のほうを対応をちょっとお伺いしたいなと思ったのが、私の方からの質問でございます。すみません。

○司会

御質問ありがとうございます。では、安田理事お答えいただいてもよいですか。

○安田理事

結論から言いますと、厳しい教員評価はやっていません。1つは自己評価ということで、各教員から学部によって多少の差はあると思うんですけども、教育研究・国際貢献・地域貢献ですか、そういったものの目標を設定して、それによって1年どうだったかというのがございます。それ以外に各学部長に、学長の方からこの1年間特筆すべき教員がいたらぜひ挙げてほしいということで、言い方は良くないですけども、ボーナス等でちょっと調整しているというようなところは内々にはやっているところでございます。

○司会

ちょっとだけ補足させていただきます。私、正にここの業務を担当しておりますので、お話しいたしますが、山形大学では3年に一度、自己評価の結果を総合して、教員評価という形でスキームを回しています。そこで実際にいただいた先生方の自己評価と、学部長であったり、そのあと役員会等でのピアレビューを含めて、先生方の評定を4段階で決めさせていただいてまして、その4段階に応じて、言葉は悪いんですが、一番下のランクに入られた先生方に関しては、何らかの形で指導、あるいはFD等を通じて改善を促すということ、平成17年度からですけれども、やってきています。したがって、教員評価のスキームとしては、大学全体で定め、ある程度の修正を認めながら、評定を受けて、最終的には大学全体で、先ほど申しました4段階で出させていただいているという状況でございます。

そういったものを含めて教員力というものも一つ評価するということもございしますが、もう一つは最後のスライドで私お話しさせていただきました、教育プログラム認定業務の作業を通じて評価するというのも考えております。それぞれのカリキュラムと授業に対して、これまでは学部の壁を超えて先生方の配置ができなかったわけですが、山形大学全体として見たときに、その科目を担当されるのは誰が一番適切なんだろうというのを、現在、試行的にですが検討し始めています。これが定着してくると、教員評価と、先ほど安田理事からもお話しありましたけれども、認定作業のところにはフィードバックしながらやっていくことができるのかなというのが今あります。

ただ、現在2年目ですので、安田理事とお話しているのは、3～4回繰り返して、この仕組みを定着させていくことができれば、我々が目指しているところには近づけるのかなというふうに考えております。

では、ほかの皆様、御質問いかがでしょうか。よろしく願いいたします。

○質問者2

本日は貴重なお話いただきましてありがとうございます。2点御質問させていただきたいんですけれども、1点目は、この基盤力調査の実践地域基盤力というところで、この性格調査というところ、前々からこういったことを山形大学さんでやっていることは知っていたんですけれども、質問項目は独自に開発されたのかなとずっと思っていたんですけど、今日お話聞いたら、富山大学の先生が開発された主要5因子性格調査というものをベースにされているということで、勉強不足で申し訳ないんですけど、この主要5因子性格調査というのは、オープンになっている、例えば私どもの大学でもこれをやりたいぞと思ったらどうぞどうぞというものなのかどうなのかというところを教えていただけたらと思うのが1点目。そして、もう1点が、その分析のところ、情緒安定性が高い子ほど成績がそんなに良くないというのがけっこう驚きの結果だったんですけれども、そこに対して指導のやり方というのが、「君は情緒安定性が高いから、もうちょっと不安定になろうね」みたいな

こととか難しいなと思うんですけど、そのあたりもしお考えなどがありましたら、ちょっと教えていただければ幸いです。よろしくお願いします。

○司会

はい。じゃあ1点目は千代先生で、2点目は藤原先生、場合によってはほかの先生に補足いただくという形でいかがでしょうか。

○千代教授

性格調査のほうですけれども、こちら基本的には概念はもともとアメリカで開発されたもので、具体的な内容については、村上先生が作られた内容がすべて本として販売されています。筑摩書房さんから売られています。ちょうど今年2017年に新第三訂版が出たので、そちらを御覧いただくと、多分心理学の専門の先生だと簡単に御理解いただいて、どういふ構成で作られたのかというのがすべて分かります。実際そのテキストを使って、そのまま全く同じ検査をすることもできます。ただ、我々が理解した上で、村上先生にライセンス費を少しお支払いして、その上で実施しているという形になります。この内容自体は、先ほど岩手大学の例も少し出ていましたが、日本で比較的デファクトスタンダードな性格調査になっているのかなと思います。

特にアカデミックな批判に耐えるという意味では、多分日本では数少ないもので、あとは比較的ニュートラルな感じですね。例えば病気とかを探すとかではなくて、ただ単に傾向を見るというような形ですので、安定して受けやすいと、受けてもらいやすいという点があります。あとはこのテストに限らず、今の学生さんで小学校等からこのような形の検査を受けているケースがけっこうあるので、学生自身にしてもそれなりに受けやすいというところがありますので、特にSPIなんかでもこのようなテストはあるんですけども、それを4年生になって、もしくは3年生の終わりに受けるぐらいだったら、1年生の初めに受けてもらって、学生指導に役立てるということも含めて考えていました。あと2つ目の部分は藤原さんですかね。

○藤原教授

はい。2つ目なんですけれども、実際5因子のスコアを使ってどういう学生指導をするのかというのはまだ決まってはいません。僕個人の考えとしては、情緒安定性が高いというのも低いというのも学生の個性の一つですし、基本的な個性を、我々教員が変えるというのはやっちゃいけないことだと思うんです。ただ、仮に自分が受け持っているクラスの学生さんが欠席傾向を見せ始めたときに、その学生の特性というものが分かっていたら、もうちょっと早めにアプローチすることができるんじゃないかなとは思っています。

山形大学ですと、現在は、3日連続休んで初めて、学生にコンタクトを取る仕組みです。我々もこのスタートアップセミナーを教えて分かったんですけども、多分、それを待って

いたらもう手遅れなんですよ。3日連続休んだ人を、授業に帰ってきてもらって、そこから単位をあげるというのは難しいと思います。ですので、なるべく早期にアプローチできたらな、というようなことを発表のときに述べさせていただきました。

○千代教授

今ちょっと藤原さんからありましたけれども、補足したいと思って、出欠情報についてはICカードリーダー等で毎時間取っていますので、3日連続営業日というのは、本当に月・火・水と休んだら連絡が行くという形になっています。ただ個別の先生については、自分の授業の出欠しか分からないので、結局1回休んだ2回休んだというところ辺でだんだん危ないなと思ってくる形になってきますので、3回目になったら、教員の立場としてはもう3回出ていないという形になります。実際のところほかの授業には出ているんですけども、その授業だけ休んでいるというのは、今のアラートには引っかけられないので、学生さんがスタートアップセミナーだけ3回連続で休んだ場合は、先生が気がつくまでは分からないというふうになっています。

○司会

では、もう1点だけ補足させていただきます。御質問に直接お答えするわけではないですが、今日の報告では分析としてお示しできていませんけれども、大学生生活困りごと調査というのの入学時に5因子調査と併せてとっています。困りごと調査は、信州大学さんが開発されたもので、ある程度、入学時にアスペルガー症候群の傾向があるのかどうか、といったことを予測するために使うことができるようです。そういったものを、この5因子調査であったり、出欠情報等と組み合わせながら、どのような形で、いわゆるリスクを抱える学生さんを早く特定をして、授業を担当される先生方がいろんな視点から検討し、指導をいただけるような仕組みづくりを行っているところです。今後、データが蓄積されれば、もう少し統計的な予測モデルなどを入れながらできるんじゃないかなというのを藤原さんと話しているところです。

では、続きまして、皆様からの御質問などをお受けしたいと思いますが、いかがでしょうか。

○質問者3

どうぞよろしくお願いいたします。直接評価というところで、基礎力テストを導入されて、非常に御苦労されているのがとてもよく分かりました。5科目もというところで、項目反応理論を使いながら、分布をうまく使いながら評価しているということがよく分かったんですけども、これ入学時、1年時、それから3年時に実施することによって、最後のところであった、最初のコンセプトにあるディプロマ・サプリメントとどうつなげていくか。そこに出てきた結果をどう学生さんに反映させるかという点と、あとさっきのところでお話が

あったFDとどう関係づけるかというのもちよっと教えていただけないでしょうか。

○司会

そこは、千代先生いかがでしょうか。必要に応じて、安田先生に補足いただいてもよろしいでしょうか。

○千代教授

はい。どうもありがとうございます。いま御質問いただいた点ですけれども、実はあまり最後までやらなかったり見せなかった部分があるんですけれども、例えば5因子調査であれば、スマートフォンのアプリのほうで、結果がリアルタイムに出ています。学生さんの手元で。今回の学問基盤力テストについても、基本的にはスマートフォンのほうでやっていますので、今回1年目ということで、慎重を期してまだ学生には見せていないんですけれども、おそらくリアルタイムに提示できると。終了した瞬間にデータが提示できるというふうなところまでやっていけると思っています。そんな形で学生に提示していくという部分がまず一つでございます。学生さんが紙でもらったほうがいいのか、それともそういうふうな形で常にどこかにファイルした形で持っているほうがいいのかというのは、先ほど浅野のほうからもありましたけれども、議論があるところで、実は紙で渡すよりも、都度親御さんに見せられるようにする、もしくは指導活動のときに見せられるようにするみたいなもののほうがいいのかというふうな議論も行っています。ですので、紙できちんとした形で成績表に付加するような形でのディプロマ・サプリメントというのも実は検討していますけれども、それに付加して、基盤力テストの成績の結果であるとか診断結果を紙に、もしくはこのスマートフォン上にリアルタイムに提示する形で、最終的にパズルのコマが揃ってきたような形になって、最終形として卒業時に完全なディプロマ・サプリメントができるというふうなことも考えております。

○安田准教授

学生へのフィードバックに関して、私から補足させていただきます。私のスライドの38枚目で少しお話しさせていただいたんですけれども、項目反応理論のアウトプットは、 θ という抽象的な値で出てきますので、それを全体を4から5段階程度に分けると。そこでもAとかBとかCとか、そういった少し格付けするような形、分かりやすくしてしまう形じゃなくて、ゴールドクラスとかシルバークラスとかブロンズクラスとか、自分が一番下のクラスじゃないと分かるような形でフィードバックしたいというふうに考えています。ですので、このディプロマ・サプリメントに、例えばこのコマンドに対して、自分は1年次はシルバーだったけれども、それがゴールドまで上がったとか、そういったことが記録できれば理想かなというふうに思っております。

もう一点、FDに関する御質問なんですけれども、基盤力テストのデータに基づいて、FD

の研修会等で、山形大学の教育の現状についての説明をさせていただくというのはもちろんなんですけれども、もう一つの使い方なり組織的なFDに関することですね。具体的にはそれぞれの科目でこの θ の値が、山形大学の1年次教育を受けた学生さんが上がるのか下がるのかといったときに、もし下がってしまったら、山形大学の教育の課題が見つかるということになると考えています。例えば、数学の θ が下がるということになれば、数学の科目を少し構成を考え直したりであったりとか、授業科目の検討だったり、いろんなものが手立てできるかと思いますので、こういった形で組織的な改善に活用するということです。

もう一点は、すみません、先ほどの質問にもありましたけれども、教員評価の方ですね。それについての個人的な教員評価にはそれを用いないと。実際にその懸念も出ています。ある学生が授業を受けたとしても、その学生は θ そんなに上がらない場合、それが教員の個人評価につながってしまうことには当然ながら懸念がありますので、あくまでそういった直接評価の結果は、組織的なFDの方に活用すると、そういった方針で考えております。

○司会

安田理事のほうから大学全体としての検討状況、個人のお考えなど補足いただけますか。

○安田理事

FDの部分ですが、今後の課題の部分が多々あって、先ほどから出ていますけれども、組織としての活用が必要だと考えています。幸い山形大学の委員会は、統括教育ディレクター会議など、オリジナルの部分が多いので、ぜひこういった部分をもっといかに利活用できればいいかなと思っていますところでは。

○司会

千代先生、何か補足いただくことはありますか。

○千代教授

実際、安田理事から話ありましたけれども、問題を作っていて試行している最中で、やはり学生の理解が想定以上に悪い問題というのが意外に見つかったりしました。それをもって、担当している先生方に、この部分が弱い感じがしますということで、具体的にデータベースで、エビデンススペースでお示しすることができますので、やはり先生方としては意外にできないんだとかというのがすぐ分かるということがあります。今後データがたまっていくと、実はそういうふうにこれまでできにくかった問題の正答率が上がってきているよとか、もしくはこれまでノーマークだったけど、ここが良くなかったよというのが、簡単に数字として見えてくるので、今後、カリキュラムごと、もしくは科目ごとの運営に関しては、かなり先生方に協力いただけるんじゃないかなと思っています。

○司会

お答えになっていましたでしょうか。

○質問者 3

はい。ありがとうございます。非常に解答の正答率が低いので、分布を見ても問題がこういうものなんだなというのが見えてきたので、ありがとうございます。あと科目数とか設問件数というのはどのくらいありますか。

○千代教授

学内でも、かなり好評をもって、これまで反対されていた学部も含めて好評をもって、自分たちも作りたいであるとか、もっとこういう問題を作ってほしい、こういう設問をお願いしたいというような話もありますので、今後増やしていきつつ、科目プール・設問プールの新陳代謝ということも含めて、拡張していくということになるかと思います。

○質問者 3

ありがとうございました。

○司会

はい。では、追加で御質問などございましたらお伺いしたいと思います。いかがでしょうか。はい、そちらお願いいたします。

○質問者 4

本日はありがとうございます。2点ありまして、簡単なもの1つと、ちょっとお考えをお聞きしたいのが1つございます。1つは、今回、YU Portal を使ったテストを実施されているということなんですけれども、スマートフォンの学生の利用率というのは100%なのかということです。また、そうでない場合は、スマートフォン以外に何かテストできるような仕組みがあるのかというところをひとつお聞かせ願いたいというのがあります。

もう1点は、実際にパネリストの先生方皆さんが、特に間接評価ですね、要は学生調査等を使った間接評価については、お話を伺っていると少し否定的なお考えをお持ちのような印象がありました。他大学との比較をみるとか、学生調査を共通でやっている仕組みを所属大学でも入れているんですけれども、そうやって他大学と比較することが間接評価で、全国平均を見るのか、経年での比較を見ていくのかということに関して、有用性というものを感じておられないかどうかということ、ちょっと曖昧な質問なんですけど、そのあたりのところをお聞かせ願いたいと思います。

○司会

1点目の質問のスマートフォン利用について、保有率は昨年が98%と、99%に限りなく近く、今年はほぼ100%でした。我々としては、保有しない学生もいることを懸念しておりましたので、貸与するための端末(iPod touch)であったり、学内に余っているタブレット端末を当日準備をいたしまして、各クラスに大体5台ずつぐらい配置できるようにしました。もう一つの懸念は、実施に30分ほど時間がかかりますので、電池切れを起こすんじゃないかということでした。その対策として、各クラスに充電器を最低でも5台分ぐらい対応できるように準備するなどしました。その結果、実際に行う上で大きな問題はなかったということと、本日、御紹介した本格実施に先立ち、去年パイロット試験を実施しておりまして、そのときに大体の課題は洗い出せたということがありました。したがって、今回は特に大きなトラブルなく実施できたというところであります。では、2点目については、藤原さんに委ねたいと思います。

○藤原教授

間接評価なんですけれども、アンケートの結果を「学修成果の可視化」と直接結びつけるのは難しいのでは、と思っています。学生実態調査とか、例えば、大学による学生サービス等を聞く満足度調査の結果が経年でどうなっているかを見たいというのであれば、もちろんアンケートは有用ですし、他大学との比較は意味があると思います。

アメリカでは、認証評価への対応として「学修成果の可視化」というのが急務になっています。僕も向こうで評価書作成に関わっていましたが、評価機関であるHLCからよく言われたことがアンケート関連でした。例えば、NSSE、National Survey of Student Engagementという全米規模の学部生を対象とした実態調査があります。ただ、NSSEの結果や他のアンケート結果を使って学修成果とすることは、アメリカではもう認められません。学修成果を可視化するのであれば、直接評価を使うのが必須で、間接指標は補完的に使う、そのように位置づけになっています。ただ、全ての大学がこのようなことを出来ているわけではなく、ほとんどの大学が苦戦しているのが現状だと思います。

僕は、去年の8月に山形大学に来たので、このAPプロジェクトに最初から関わっていたわけではありません。来たときには採択されていたので、正直びっくりしたんですね。山形大学では、アメリカでもやっていないようなことをやろうとしている人たちがいたわけです。

まとめると、学修成果の可視化であれば、直接評価をメインにして、間接評価は足りないところを補う形で使うのが理想形だと思います。間接評価があまり勧められない、もう一つの理由としては、アンケート等の結果からだと、改善点が分からないんですね。さっき千代先生がおっしゃった、あれは物理の問題ですが、物理の概念を理解しているのかどうかという具体的な問題で、実際理解している学生が少なかった。この直接的なエビデンスを使って、じゃあ教育内容をちょっと変えてみよう、ということができるんですが、仮にそれがアンケートで、あなたは物理の概念が分かりましたか、イエス・ノーみたいなアンケートを作

っちゃうと、ノーが増えても何処を改善すればいいかわからないじゃないですか。GPA も間接指標ですが、GPA が去年から 0.3 下がったという結果が出ても、その数字から改善点は分かりません。上がったとしても、教育効果が出たからなのか、それとも別の要因が影響したかは分かりません。ですので、今回のテーマである、学修成果を可視化して教育改善を図る、この点からは直接評価を用いて具体的な改善点を見つけることが重要なのかな、と思っています。

○司会

1 点だけ補足させていただきますと、今の大学を取り巻く環境については、認証評価対応で求められていることは、多分、アメリカと大差ない状況になってきていると思います。日本の評価機関は、まだ明確に示してはいませんが、当面は間接評価が認められても、今後、これだけでは不足することが懸念されます。藤原さんが言及していたように、自分たちの教育の状況はどうかということ了他大学と比較して把握するという意味では、多分あのアンケートというのは非常に重要な情報源になりますし、我々も例えば基盤力テストに加えて、実際に卒業していった社会でどう活躍しているのかというのは、アンケートに頼らざるを得ないということも考えております。したがって、アンケートを否定しているわけではありませんが、さきほど藤原さんの話にもありましたように、教育の改善とか、いわゆる学生さんがこれができるようになったということを示す上では、直接側出来るテストを通じて、結果こうだから学生さんはできるんだというようなことを示していかないと、これからは苦しくなるんだろうなということを考えながら、取り組んでいるところです。

では、フロアにマイクを返したいと思います。いかがでしょうか。はい。お願いいたします。ただいま、マイクをお持ちしますので、少々お待ちください。

○質問者 5

所属大学では、IR を始めたばかりで、勉強させていただくためにここに参った次第でございます。ちょっと質問なんですけど、この冊子の 13 ページ、13 枚目の資料のスライドなんですけど、学問基盤力テスト、1 年次ということで、数的文章理解、そして数学・物理学・化学・生物学などが挙げられております。特に、この 1・2・3・4・5 ですか、5 つのものについて、決意された経緯があったのかということ、あとここですね、例えばこのあと増える見込みというのはあるのか。あるいはクラスで言いますと、例えば社会とか国語とか、ああいうふうに小論文とかですね、そのようなものを件数ごととか、これをまとめる予定はあるのかとか、そんなことをちょっとお聞かせいただければと思います。よろしく願いいたします。

○千代教授

もともと3年ほど前にこういうプロジェクトを始めたときには、アクティブラーニングが学生に対する教育効果がどれくらいあるのかということから実は始まっています。そのときに話題になったのが、やはり数学・物理・化学・生物という理系科目で、アクティブラーニングがどれくらい効果があるのかということのを測定していくというのが、もともと安田先生の話の中でもありましたけれども、既に概念調査票というのがあります。これが先ほどありましたような問題で構成されている、世界的によく使われているものが幾つか各科目にあるんですけども、それがまず念頭にあったので、知識とかではなくて、概念が理解できている、もしくは応用できるのかという部分で測定しているということが基本方針でありました。ですので、そういうものが既にあった理系のこの4科目は、早々にこれを入れて、知識ではない部分を測定しようということがありました。要するにもとものプロトタイプがあったということですね。

もう一つ、正に文系の学生さんや、理系の学生さんもちろんそうなんですけれども、文章の理解力であるとか、英語能力ですね。そういうものをどうやって測定するかというところで、ときどきニュースにもなる OECD の成人力調査であるとか、そういう部分でキーコンピテンシーの測定が実際なされています。そこを参考にした結果、幾つかのテストというのが実際その成人力調査の中で行われているんですけども、ほとんどの調査というのが、数的理解という4つのテストのうちの数的理解で、ほぼ1パラメータで説明できてしまうというのが科目の中にありまして、それで、ではそういうのに近い問題を1つ作れば、うまく学生の理解力というのを、文章理解力を測定できるのではないかということがありまして、それで数的文章理解というふうなものを構成した。ただ、これ名前があまり良なくて、文系の先生方がじゃあもっと文系の科目に即したものを作ってくれという話が出てくるんですけども、実際のところ文系でも必要であり、理系でも必要であるような文章の理解力なので、本来、論理的な文章理解とか論理文章理解とかにしたほうが良かったんじゃないかという話にもなっています。

今後のことなんですけれども、もちろん各学部からそのようなテストをもう少し作ってほしいという話がありまして、幾つかのパターンを考えておりまして、1つは数的文章理解の名前を論理的な文章理解とかに変えて、そういうふうな各学部が思われているような問題を挿入して、同じなんだけどちょっと違うというふうな問題を構成を考えるとというのが1つ。もう1つは、そのような文系の先生方が期待されているようなものを新たに作ってしまっただけで、それでやると。ただ歴史とか、文科省とかでも同じことを聞かれるんですけども、非常に特化しているような問題がちょっと難しいので、できる学生とできない学生の差がはっきりしすぎてしまうので、そのあたりはちょっと今後議論の対象になるかと思います。ただおっしゃられたような内容の方向性は十分考えております。

○質問者5

どうもありがとうございました。

○司会

はい。ありがとうございました。お答えになっていましたか。よろしかったですか。もし何か補足があれば。

○質問者 5

はい、大丈夫です。

○司会

では、ほかの皆様いかがでしょうか。ぜひこの機会に、簡単なこと、あるいは事実確認も含めてありましたら伺いしたいと思いますけれども。はい。では、お願いいたします。

○質問者 6

大変努力されていて大変恐れ入りました。敬意を表したいと思います。二つほど素朴な質問なんですけれども、客観的なテストが大事だというのはそのとおりだと思いますけれども、5問程度のテストで、項目反応とかテストでどの程度のことが分かるのかなというような素朴な疑問があるんですけれども、各科目5問の質問で議論をすることの意味について、ちょっと素朴な疑問がありましたので、お考えを聞かせていただければ。もう一つは、基本的にテストが大事なのは、学生が学ぶ意欲にどのような影響を与えるのか。成績を見ることによって、そういうテストが導入されることによって、学修の学び・意欲というものが向上するかどうか。これが私は一番大事かなと思っています。成績が低かろうが高かろうが、関心がなければあまり意味がなくなってしまって、私の世代から考えれば、成績がどんどんどんどん低かろうが、全然関心がありませんという学生が多かった時代の人間からすれば、成績に過敏な学生というのは、むしろ情緒不安定な学生であって、情緒が安定していれば、基本的には成績なんか気にしないと。そういうちょっと余談ですけども、聞きたいのは、そういうものを導入することによって、私の熱意がどう向上したのか。そういう意味では間接的な評価がとても私は大事だと思うんですけども、そういう熱意を持っている、変わるのかどうか、その辺の関係について聞かせていただければ。

○司会

御質問ありがとうございます。1つ目は、5問程度のテストで、どれだけそのテストに興味があるのかという、そういった御質問だったかと思うんですけども、これは何に関係してくるかと申しますと、そのテストの精度ですね。それに関係してきます。いま5問用意しているわけなんですけど、すべての解答パターンを数え上げますと、2の4乗で16パターン出てきます。理想的にはその16段階で分けられると一番いいんですけども、そこまでの精度は残念ながらありませんので、最後に申し上げた4ですね、4から5段階程度ですね。

そのぐらいの粗さであれば、5問程度で十分であるというふうにこちらは考えております。

○千代教授

5段階ということは、正に先生のおっしゃったように、学生がその成績を見て良かった・悪かったというのを一喜一憂するような話を期待するというのは、やはりおかしい話だと思いますので、むしろそれを見て、もうちょっとここを勉強しようかなとかというふうに思ってもらえるような部分というのを、ここに含めているというところが正直なところなんです。なので、我々のほうで、もちろんマスで見るところ、どれぐらいの結果が出てきているか、細かい数字まで出てくるんですけど、学生単体から見るとやはり5段階ぐらいしか見えないので、それほど成績の良さ・悪さというのは、学生にあまり響かないようには配慮していますので、もう一つおっしゃられている定性的な学生のアンケートの話もあるんですけど、こちら側はもちろん取っております、取りつつ、もう一つポイントとしては、これもそういう態度ですね。例えば物理とかでもよくあるんですけども、アメリカで実施されているような、物理に対する興味とか理解とか、それが役に立つと思っているかどうかという、そういう態度の指標と物理の成績の関連性というのは実はほとんどないというのがアメリカでも測定されていまして、ですので、実はあまりそういうふうな学問が好きかどうかとか、その学問が意義があるかどうかというのと成績とかというのは、実はあまり関係なさそうであるというふうな雰囲気になってきていますので、そこを考えると、やはり大学として何を考えないといけないかという、学生がその大学で学ぶことに対する、もちろん成績も上げてもらいたいんですけども、正にいま自分たちがどういうふうに大学で過ごすのかというのを主体的に考えていくような環境づくりというのが、やはり問われていると思います。単純に言って成績を上げようとか、もうちょっと嫌な言い方すると、資格試験の合格率上げようとか、就職率上げようとか、そういうことではなくて、やはり大学が学生にとって学びの場としてだけでなく、生きていくための何か大切な場所というふうに認識してもらえるようにすると、非常に精神論的になってしまいましたけれども、実際のところそこを目指していくのが、多分本来の大学の部分だと思いますので、何かあまり説明になっていないんですが、先生がおっしゃるとおりだと思いますので、成績で切って学生さんに何かそれで悔しさを勉強してもらおうとか言うつもりは実はないというのが正直なところなんです。

○安田准教授

先ほど先生おっしゃったように、こういったことを通じて、学生が学ぶ意欲をいかに向上させるか、それは当然なことだと思います。それと同時に、さきほど話させてもらいましたが、これもテストして、あなたは65点、あなたは20点というふうな点はもちろん出る可能性が非常に高いんですけども、自分も知って、千代さんのほうからありましたけれども、やっぱり振り返る、反省する、そしてちょっと学ぼうかと、そういった習慣をつけてくれるということも大きいかなという気がします。本学の理事に、医学部出身の理事がいま

すが、医学部医学科の学生は正課のカリキュラムにない科目を測定されても、点数が落ちて、これはどうしたらいいのかねと、そんなことをおっしゃっていました。我々としては、学生個人が、くどいですがけれども、自分の立ち位置がどうであれ、それに対してどうやっていくのか。さらには学びをずっと続けていく、そういったところを考えてくれる一助になればいいかなと、私は個人的には思っています。

○司会

いかがでしょうか。お答えになっていましたでしょうか。はい。ありがとうございます。

そろそろ時間が近づいてまいりました。最後に、お一つぐらいいただたらお伺いできると思いますが、この際聞いておきたいことなどございましたらお伺いしたいと思いますが、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

登壇者の皆さん、何か補足されることあれば、いいですか。よろしいですか。

はい、では一旦ここでAPシンポジウムを終了させていただきます。冒頭、お願い申し上げましたけれども、皆様のお手元の配布資料に、水色のアンケート用紙を封入させていただいております。確約はできないんですけれども、おそらくAP期間中、毎年、このシンポジウムを開催させていただく予定です。来年は、入学時に加え、1年の教育を受けた学生さんのデータを用いて入学時と1年終了次の教育効果について話題提供できると考えているところです。こういったことを含め、是非アンケートにお答えいただいて、こういったことを知りたいとか、あるいはこの辺は使えなかったけど次回は予定ないのかなど御要望も含めてお寄せいただくと、非常に我々としてはありがたく思います。記述のお手間をとっていただき恐縮ですが、ぜひ御協力いただきまして、出口におりますスタッフにお渡しいただければと思います。

ここからは、お願いになります。大塚先生からも冒頭に御挨拶いただきましたように、午後から明日1日、EMIR勉強会を実施させていただきます。引き続き御参加の方におかれましては、1時半までにこの会場にお戻りいただきまして、申し訳ないんですが、資料等の関係で、再度、受付をお願いいたします。御協力のほど、よろしく願いいたします。

本日、このシンポジウムのみご参加の方々におかれましては、ぜひ最終目的地までお気をつけてお帰り願います。

本日、APの成果として、基盤力テストの実施結果を御報告をさせていただきました。配布資料等、もし何かお気づきの点などございましたら、ぜひお申込み時にお示しいたしました連絡先まで御連絡いただきましたら対応させていただきます。2時間半の長丁場となりまして、皆さんお疲れかと思しますので、ここで終了したいと思います。

最後になりますが、大塚先生はじめ、大正大学の皆様には、会場提供のみならず、数々の御支援をいただきましたので、この場をお借りして、主催校を代表して御礼申し上げます。どうもありがとうございました。